

特 別 講 演

講演者のプロフィール

井上 京子（いのうえ きょうこ）

【略歴】

上智大学文学部英文学科卒業，イリノイ大学大学院博士課程修了.Ph.D.（人類学）．
専門は言語人類学．

コロラド大学（コロラド・スプリングス校）人類学部講師（Full Time Lecturer），
マックス・プランク心理言語学研究所 PD，慶應義塾大学理工学部専任講師，助教授を経て，2007 年から同大学教授（現職）．

【主要業績】

『もし「右」や「左」がなかったら：言語人類学への招待』1998. 大修館書店

Visualizing Ability and Nominal Classification: Evidence of Cultural Operation in the Agreement Rules of Japanese Numeral Classifiers. In Senft, G..ed., *Systems of Nominal Classification*. pp. 217-238, 2000. Cambridge University Press.

「意味の普遍性と相対性」松本曜（編）『認知意味論』pp. 251-294, 2003. 大修館書店

「空間認知とコミュニケーション」井出祥子他（編）『講座社会言語科学 第 1 巻 異文化とコミュニケーション』pp. 118-128, 2005. ひつじ書房

「言語と身体性」唐須教光（編）『開放系言語学への招待 -- 文化・認知・コミュニケーション』pp.57-82, 2008. 慶應義塾大学出版会

「カテゴリー化とプロトタイプ」池上嘉彦、山梨正明（編）『認知言語学 I: 講座言語研究の革新と継承 4』pp.313-329, 2020. ひつじ書房

【その他】

エヴェレット、ダニエル L（著）.屋代通子（訳）『ピダハン!』校閲, 2012. みすず書房

「ことばで測る距離感」Civil Engineering Consultant, Vol. 300, 12-15, 2023.

ことばで測る快適で適切な空間

ーポストコロナのプロクセミクス（近接空間学）ー

井上 京子(慶應義塾大学)

あいさつが交わせる距離 150 cm とプロクセミクスと social distance

人間間の距離のとり方とコミュニケーションに注目し、プロクセミクスという概念がエドワード・T. ホール(1966)によって導入されたのは半世紀以上前にさかのぼる。人類がことばを獲得し、コミュニケーションをとる様を研究対象とする人類学において、プロクセミクス研究は「異なる文化に属する人々はちがう言語をしゃべるだけでなく...ちがう感覚世界に住んでいる」ことを検証できる興味深いフィールドである。特に、人間には誰しもお互いの距離を何 cm~何 m とるのが適切で快適か、ある程度決まった距離感覚が存在するが、その基準は文化ごとに異なることを明らかにし、それぞれ自己から近いゾーンから intimate distance 密接距離、personal distance 個体距離、social distance 社会距離、public distance 公衆距離とホールは名付けた。当時のアメリカでの調査結果を見ても、「アメリカ人全般」とひとくくりにできる基準はないものの、アフリカ系、ヒスパニック系、南欧系などのグループごとにきわめて異なるプロクセミクスのパターンがあることが報告されている。

一方、「日本人全般」のプロクセミクスがあるのか、という疑問もわくが、それには日本人の対人距離の取り方調査を参考にすることができる。西出(1985)、大坊(1998)らの研究によると、会話が成立するのは personal distance に当たる会話域 5cm~150cm、そして気づまりを感じない程度の距離は近接域 150cm~300cm、という結果が出ている。この近接域の境界線が 150cm という値であること、および 2019 年以降世界に蔓延した新型コロナウイルス感染症（以後コロナと略す）予防のための指標として世界保健機関（WHO）等が提示した social distancing（後に physical distancing と改められた）と重なる距離感であることは興味深い。しかし、同じ social distance という名称で呼ばれるこの 2 つの距離・域はもともと異なる空間を意味していたのだが、後付けでコロナ対策用語として用いられたため、誤解が生じることとなった。

ホール(1966)の指す social distance は、パーソナルスペース（personal distance の円心領域）を侵さず、かつ知人同士の対人距離として快適に感じる近接域のことだが、そもそも文化ごとに異なる対人距離の social distance だったものが、コロナの全世界蔓延に伴い、「ソーシャル・ディスタンス」の持つ意味が変化した。飛沫感染を避けようとする人間の心理的

動機から、個体距離と社会距離（social distance）の境界線が崩れたのである。また、コロナ以前は地域や文化ごとにある程度特徴づけられていた距離の数値も、WHO によって Physical Distancing「〇〇cm」とグローバル・スタンダードが課せられた結果、強制的に統一化され、2020 年～2022 年にわたり全人類への距離感の指標となった。

こうした人間間距離のスタンダードが、コロナの全世界蔓延により大きく変化したために、今後、人間同士のコミュニケーション行動にもその影響が表れる可能性がある。コロナ以前の分類である contact culture（コミュニケーション時の対人距離が近い文化）や noncontact culture（同、遠い文化）の特徴がみられる地域において、コロナ後の実態を調査することにより、人々の対人距離感覚、つまりどれくらい他者から離れていれば快適に感じ、コミュニケーションが円滑に行われるのか、コロナ以前の人々が共有する近接域数値に戻るのかという点については、今後継続的な調査が必要となるだろう。

本講演では、ホール(1966)のプロクセミクス研究で距離感に有意な差がみられた2か国、すなわち日本とアメリカ合衆国のコロナ収束直後(2023 年)をフィールド調査した事例をいくつか紹介し、特に日本ではどのような環境条件がコミュニケーション行動の変化に影響を及ぼすのか考察する。また、人々が快適で適切だと感じるような空間デザインを建築分野と連携して探る試みを紹介する。

事例 新型コロナウイルス感染症がもたらした距離感への影響

マスクで隠されるコミュニケーション情報 ～目でモノを言う日本人、口元でモノを言う欧米人～

マスク着用が円滑な会話を阻害するとして、日本よりずっと早い段階でマスク外しが欧米で一般化した背景には、目でモノを言う日本文化、口元の表情でモノを伝える欧米文化、といった違いがあることは通説となっている。この説からすれば、マスクを着用していても目の表情から話者の意図を読み取るのが上手な日本語話者は、マスクである程度飛沫感染を防げるから近接域 social distance をコロナ以前に戻してもよいはずなのに、2022 年段階では対人距離はコロナ以前に戻っていなかった。そこで著者は大学の建築系研究室および美術研究室の同僚とともに、リモート授業からキャンパスでの対面環境に戻ってきた学生のための憩いの場を創出し、プロクセミクス研究の実験的フィールドとなるプロジェクトを立ち上げた。

他方で、口元を隠してしまうマスクはコミュニケーション情報の重要な部分が損なわれるから、といった理由でマスク無しの会話が社会全体でおおむね復活しているアメリカ、イギリス、フランスなどでは、飛沫を浴びないように、より遠い対人距離を取りそうなものなのに、近接域 social distance もコロナ以前に戻っているように見受けられるのは不可解な現象である。そこで、アメリカの3つの大学で2023年11月～12月にフィールドワークを実施した結果、マスク着用者はほぼゼロだった。この環境でのコミュニケーション行動の変化

に關係する条件として、以下の2点が顕著に見られた。

1. 親密度の差：家族 vs. 友人 vs. 他人

【家族の結束が固い】（屋内）

- ・ 固定イスが設置された講堂でのキャンパスツアー説明会では、入学希望学生 1 名＋家族 1～3 名の集団が着席する際、隣の集団から必ず 1 座席間隔を空けて着席するという行動を取っていた。1 座席空けるスペースが足りない場所は避けていることから、見知らぬ他人との距離感はイス 1 つ分であることがわかる。

【友人は緩やかなつながり】（屋内）

- ・ 対面授業の固定イス教室（auditorium）においては、あいさつを交わす友人は隣同士着席し、知人ではない者同士は 1 座席以上空けて着席していた。
- ・ 学生会館の建物内カフェ店舗において注文待ち行列の間隔は、おしゃべりする友人同士は体が触れ合う親密距離、知人ではない者同士は最低 150cm の距離（social distance 且つ physical distancing）を空けている。ただし、立ち位置の前後共に女子の場合、その距離は 1m 程度に縮む。

2. 屋内 vs. 屋外

2024 年 5 月に後追い調査としてアメリカの大学の卒業式を観察したが、いずれのイベントも屋外で行われていた。フットボールスタジアム、テントを張った中庭、建物脇の吹き抜けの回廊、これら各所では、家族、友人、知人、見知らぬ他人等、すべて入り混じって距離を取らず、お互い接触しながらおしゃべりに興じていた。これがもし屋内での開催だったなら、親密距離での接触は避けたのではないかと予想される。

これに比して日本の大学では、マスク着用者がまだ全体の半数いた 2023 年 10 月、コミュニケーション行動の変化に上記のアメリカのような条件は見られなかった。今後、日本でも脱マスク化が進むと、行動の変化に諸条件が現れる可能性があり、継続調査を実施中である。

引用文献

Hall, Edward. T., *The Hidden Dimension*. Anchor Books, 1966. 日高敏隆・佐藤信行(訳)

『かくれた次元』みすず書房、1970.

西出和彦 「人と人との間の距離(人間の心理・生態からの建築①)」, 建築士と実務 5: 95-99, 1985.

大坊郁夫 『しぐさのコミュニケーション』サイエンス社、1998.